

主釋尊此等の疑を晴さんがために壽量品をとかんとして、爾前迹門のきゝ(所聞)を擧<sup>ケテ</sup>云、一切世間天人及阿脩羅、皆謂<sup>おもへり</sup>今釋迦牟尼佛出<sup>デ</sup>釋氏宮去<sup>ニ</sup>伽耶城不<sup>レ</sup>遠坐<sup>シテ</sup>於道場得<sup>ニ</sup>阿耨多羅三藐三菩提等云云。正此疑答云、然善男子、我實成佛<sup>シテヨリ</sup>已來無量無邊百千萬億那由佗劫等云云。華嚴乃至般若・大日經等は二乗作佛を隱のみならず、久遠實成を説かくさせ給へり。此等の經々に二の失あり。一には存<sup>スル</sup>行布<sup>ヲ</sup>故仍未<sup>レ</sup>開<sup>セ</sup>權。迹門の一念三千をかくせり。二には言<sup>フ</sup>始成<sup>ヲ</sup>故會未<sup>レ</sup>發<sup>セ</sup>迹。本門久遠をかくせり。此等の二の大法は一代の綱骨・一切經の心髓なり。迹門方便品は一念三千・二乗作佛を説て爾前二種の失一を脱<sup>ツ</sup>たり。しかりといえどもいまだ發迹顯本せざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作佛も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波上に浮るにいたり。本門にいたりて、始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打やぶて、本門十界の因果をとき顯<sup>ス</sup>す。此即本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具<sup>ル</sup>し、佛界も無始の九界に備<sup>ス</sup>て、眞<sup>ニ</sup>十界互具・百界千如・一念三千なるべし。かうてかへりみれば、華嚴經の臺上十方・阿舍經の小釋迦、方等般若の、金光明經の、阿彌陀經の、大日經等の

權佛等は、此壽量の佛の天月しばらく影を大小の器にして浮給を、諸宗の學者等近は自宗に迷、遠は法華經の壽量品をしらず、水中の月に實月の想をなし、或は入て取んともひ或は繩をつけてつなぎとどめんとす。天台云、不識天月、但觀池月、等云。日蓮案云、二乗作佛すら猶爾前づよにをぼゆ。久遠實成は又になるべくもなき爾前づりなり。其の故は爾前法華相對するに猶爾前こわき(強)上、爾前のみならず迹門十四品一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・壽量の二品を除ては皆始成を存せり。雙林最後、大般涅槃經四十卷、其外の法華前後の諸大乘經に一字一句もなく、法身の無始無終はとけども應身報身の顯本はとかれず。いかんが廣博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出・壽量の二品には付べき。されば法相宗と申宗は西天佛滅後九百年に無著菩薩と申大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、彌勒菩薩に對面して一代聖教の不審をひらき、晝は阿輸舍國にして法相の法門を弘給。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王頭をかたぶけ、五天幢を倒して此に歸依す。尸那國の玄奘三藏月氏にいたりて十七年、印度百三十餘の國々を見き、て、諸宗をばふりすて、此の宗漢土にわたして、太宗皇帝と申賢王にさづけ給、肪・尙